

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 戯曲 紫野（一幕）：文苑 |
| Author(s) | しづか |
| Citation | 龍南會雑誌, 149: 13-25 |
| Issue date | 1913-03-15 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/6430 |
| Right | |

戲曲 紫

野

(一幕)

登場人物

肥後國司 清原元輔

村の若衆數人

及 家臣若干

猿廻し夫婦

檜垣の姫

駕籠舁

舞姫 いなり

花の精大勢

時 晩春の午後

場所 岩戸山中紫野

しめやいなる眼にて幕開く、舞臺向ふ一面淺黃幕

唄「影白川の水汲めば月も袂や濡らすらむ。流るゝ水のあはれ世の其理を汲みて知る

檜垣姫關伽桶を手にして花道より登場

唄「あゝあぢさなき人の世の妾もつひに朽木櫻」

本舞臺に來り眼になる

文苑

唄「本の憂き身の報いならば今の苦しみ去りもせでいや増りぬる思ひの色

姫「緑に見わし黒髪も土水の藻屑、塵芥ちりかたと變りける、この有様を何とせう」

さ袂にて涙を拭ひ

「またしても女の愚痴、ざれ／＼速いであの岩戸の觀世音に闕伽の水をばまつらう」

さ右に入ると同時に眼になる

唄「君の添寝に憎くまれし甘泉殿の春の夜も一日の夜と早なりぬ

さ歌ひ了つて淺黄幕を切り落す

舞臺

右側上手へ寄せ土手を作り、その側に櫻大木あり、花咲き亂る、尙所々に櫻の花盛り、一面に櫻の釣枝、遠見に菜の花畑を見する等繪て華やぎし春の野の模様宜しくあるべし。にぎやかなるはやしにて花道より五六の若衆花見姿にて出て来る

△「何と見事な櫻では御座らぬか」

□「何時もながら奇麗なものぢや、盃に落ちこむ花片は又一入艶なもので御座らう」

○「急いで參らう」

さ櫻の木陰にて酒宴をはじむ

△「廻せ、廻せ」

○「廻せ、廻せ」

□「酒はあるか」

△「何ぼでもある」

×「聲の潰れるまで飲まう」

□「息の塞がるまで飲まう」

○「このやうな奇麗な櫻の下で命が絶われれば極樂ぢや」

稍々長き間盃めぐる

△「酒を飲まいで何とせう」

×「身共とても御同感、月を見やうと、花を見やうと、酒がなくては満らない」

△「櫻咲く櫻の山にもた酒がなければ只の山。憂ひを掃ふ玉箒、一寸二三ヶ月留守にすると云つても別れの

酒。歸つて来て目出度いと云つて酒。酒の上で喧嘩をして仲直りが又酒。家が焼けて酒。焼けなかつた祝の酒。善い事がある前祝の酒。失敗なつて自暴酒。目出度いにつけ酒。悲しいに附け酒で御座る」

○「誠に御酒といふものは度さへ過さなければ愛嬌のある結構なものぢや」

稍々長き間盃めぐる

□「身共に人麿程の歌才があつたらここの所何とか一句唸るのに残念至極、櫻の花と酒いゝ歌題ぢや御座らぬか」

×「いかにも一杯、一杯、又一杯こりやまるきり白樂天の詩をつくりぢや」

△「時にその歌の話でふと思ひ出したが角井の御所の御前様は都でも名高い歌の名人で御座るげな」

○「角井の御所の御前様とはあの清原様の事であらうがな」

△「いかにも後撰集を撰ばれた梨壺の五人の中の一人で歌の聖との事、この花を御覽じたら定めし名吟百出であらう」

×「たふその清原様について身共は近頃珍らしい話を聞いたによつて酒の肴にゆる／＼話さう」

一同「して珍らしい御話とは」

×「ほかでもないあの岩戸の觀世音に日毎關伽の水をまつる檜垣姫の事で御座る」

一同「してその御話とは」

×「先年清原様が筑前の國司として下られしに姫は當時飛ぶ鳥も落すと云ふ豪い勢で筑紫にその全盛を謳はれた白柏子、して姫も又天下にかくれない歌の名手なりし故一方ならず清原様の御寵愛を被りしに槿花一朝のたどへとやら、見るがげもない今の姿、はる／＼と此肥後の國にさすらひの身をかこちつゝ憂き年月を送れるに、何ぞ不思議では御座らぬか、清原様には肥後の國司として再び西國に下らるゝとは」

○「それは何かの因縁で御座らう」

×「眞まことに宿世すくせのさだめで御座らう」

△「しかし清原様にも檜垣の今の姿を御覽じたら定めし卒都婆小町の感が御座らう」

稍長き間盃めぐる、いなり酔ひ櫻の小枝をかつきよるめき／＼花道より出て来る

□「剛たけなほふ酔つた、ちと風にでも當つて酔を醒まさう、を／＼それ／＼踊りなりと鬼渡りなりとなすで御座らう」

と其聲に皆々立ち上りいなりを見てびつくりする

△「さあ大變櫻の下に剛い美人が立つて居るもしや花の精では御座らぬか」

×「それとも人形か」

いなり又よるめきつゝ、来る

○「いや動いたのをみると確かに人間ぢや」

×「成程人間、人間、宛然人形のやう、是や上の櫻も眺めを奪はれさうで御座る」

いなり「いとしまをかけてとぶ鳥までや鳥をにもはねにもことづたへせむ」

と繰り返し袂を雲形に空を眺め思ひ入る

×「何ぢや變てこな事を云つては空を眺めて泣いて居る」

□「解ゆせた可愛相にあれば氣違ひぢや」

△「何狂女となこれは二度びつくり」

○「井筒姫に水さゝれし膽駒姫と見たは何うぢや」

△「大方左様な者で御座らうわい」

一回「こんな所に長居は御無用」

と捨臺詞にて若い衆左へ逃げこむ

いなり「わしを狂ひ女めと見やるも道理、ほいない別れのその後は晝は終日夜は終夜泣いて涙の涸るまで、エ、

しよんがいな」

と色々怒めしきこなし唄になる

唄「宇治の柴舟あさ瀬を渡る、わたしや君ゆへこがれゆく

いなり「男心の憎いのは」

唄「外の女子に神かけてあはづと三井のかねごとも堅い誓ひの石山に

いなり「氣違ひにもならうもの、身は空蟬の唐崎や」

唄「待つ夜をよそに比良の雪、ようものせたにわしやのせられてふみも堅田のかた便り、心やばせのかこちごと

と唄の中に花道より猿廻し夫婦睦しく語られつ、出て来る

夫「村の者の云へるには櫻の花の開いた向の土手を真直ぐに」

妻「それから右に登れば雲岩寺とやら」

夫「急いで行かう」

と右へ入る、いなり二人の後姿をうち見やり思ひ入る

いなり「あゝ、最うくだらぬ愚痴を列べすと花に狂へる蝶々でも追つて暮すが上々、さうぢやく」

といなり左に入る

唄「蝶々とまれ、菜の葉にとまれ、菜の葉があいたら櫻の枝に」

の唄にて以前の猿廻し夫婦歸り來り花道にかゝれる頃清原元輔の家臣急ぎ足にて登壇、猿廻し夫婦には氣付かぬ体にて本舞臺にかゝり

家臣「さて雲岩寺とやらは何れで御座らう」

と邊りを見廻し猿廻しを認め

家臣「それなる御兩人、身共はこの邊りには一向不案内の者なるが雲岩寺とは何れやら御聞かせ下され」

猿廻し「その雲岩寺とやらは向の土手を真直ぐに右へ御登り遊ばされ」

家臣「これは御親切に有難う」

と右へ入ると同時に花道より元輔四五人の家臣を伴ひ駕籠にて出て来る

家臣「御前様實に一面奇麗な櫻で御座る」

とたれを上げる元輔櫻をながめ

元輔「花ちらす風の宿りを誰か知るわれに教へよゆきて怨みむ」

と口吟みつ、獨り興に入る

駕籠「それぢや参りませう」

と本舞臺に來る。此間に檜桓、廻、伽、補に櫓を入れ土手を下り來り本舞臺にさしか、り

廻「山路で逢ひし清原様の家臣とやら、山下菴を尋ねしが今更名のるも耻づかしく雲岩寺の寺僧に御聞きあれ

と何心なげに行きすぎしが」

とふさ駕籠を見元輔のそれと氣付き急に避けて後にまはる

元輔「それなるはもし檜桓殿では御座らぬか」

廻「うば玉のわが黒髪は白川のみづはくむまでなりけるかな」

と低調に口吟み多くを云はず

元輔「左様申すは確かに檜垣殿、それにつけて先つ方家臣一名山下菴に遣はせしに今に何の音沙汰もなく何れ

に参つたやら、幸櫻の花盛り過ぎし昔の思ひ出を木蔭に語るは一入興味ある事で御座らう」

廻「大それた、紅顔の粧ひ、舞女のはまれも今はゆめ、みづはくむまでなりはてし影はづかしき廻なるを」

家臣櫻の木蔭に蔭をしく、廻絶えずうらぶれし已が姿を耻づ

元輔「歎きは御最もながらかの金谷の春の花は一衰の色を見すると聞く」

嫗「何とやらむ此春は年ふりまさる朽木櫻、ことしばかりの花をだに老の鶯あふ事も唯涙にむせぶばかり」

元輔「同じ流れを汲むをだに他生の縁と申すもの、まして忘れもせず、われ任滿ちて京へかへるとき筑紫に別れを惜しみし二人なりし、御聞き候へ、數日前わが館にて二三の者より集り歌語りせし時その場に居合せし一人の若者の云へるやう白川の邊り蓮臺寺と云ふに檜垣と呼べる嫗住めるか今は昔筑紫にてときめきし白柏子、歌の名手にて候が此嫗岩戸靈嵩洞の觀世音を深く信じ山下菴より日毎闕伽の水をその觀世音にまつると聞きわれひそかに盡せぬ縁をよろこべり。今日の一日紫野に櫻狩りを思ひ立ち、ならば名高き鼓の瀧も山下菴も訪はしものと思ひけるが宿世のさだめか今こゝに、過ぎし昔を御物語り候へ」

嫗「是迄尋ね給ふ事御情には似たれども訪ふにつらさのまさり草最う胸一つばいで」

と悲しきこなし家臣宴の用意をなす

元輔「檜垣殿せめて今日のみ老いを忘れ候へ」

と元輔檜垣に盃をさす筈あり家臣の間に稍々長き間盃めぐる

元輔「時に早瀬殿には近頃歌に御熱心と聞く、又朝戸殿にもことの外の御熱心とな、この檜垣殿は歌の名手座輿に歌語り等はいかゞで御座る」

兩人「定めし興味の深い事で御座りませう」

と急ぎ矢立と短冊を取り出し讀み難き末を嫗に乞はむものと兩人しきりに頭をひれる

嫗「それは誠に恐れ入つた御言葉、何のい妾のやうなふつゝかもの」

早瀬何か短冊に認め兩人うなづき合ひ元輔の前に置く

元輔「この下の句を檜垣殿にとな」

ま唄の所に持ちゆかしむ、唄色々辭せしが終に手にさりつくくま打ちながめ

唄「わだつみの中にぞ立てるさを鹿は」

ま靜に繰り返し頭をかたげる、兩人これを見て顔見合せ無言、眉の筆をさりさらくま短冊に認むるを見て驚く、唄短冊を早瀬に渡し早瀬それを元輔の前に置く

元輔「わたつみの中にぞ立てるさを鹿は秋の山邊やそこに見ゆらむ、あゝ實に面白い末ぢや、秋の山邊やそこに見ゆらむ」

兩人無言にてその調率なる行爲を耻づる体、いなり以前ま同じ姿にて左より登場

いなり「ついそこまで追つて來た雄蝶と雌蝶、まここにそんなにかくれたやら、さつきの童とした事がしようことなさに邪魔をして」

ま云ひつ、進み來り唄ま顔見せ驚く

いなり「檜垣殿では御座らぬか」

唄「いなり殿では御座らぬか」

いなり「してまた今日は」

元輔「そのいなりとやは檜垣殿の知人で御座るか」

唄「いかにも左様で御座ります、いなりと申す舞姫で御座ります」

家臣「ても美しい女ではある、御前いかがで御座る花の酒宴に面白い舞ひでも一つ願つたら」

元輔「それはいふ思ひつきいなりとやら檜垣と知れるを縁として何なりと一つ舞ひ下され」

嬌色々いなりになむ

嫗「いなり殿あの方は角井の御所の御前清原様で御座る」

いなり「御前様には妾のやうなふつゝか者をも御見棄てなく、妾は舞姫のいなりと申すもの」

元輔「いかにも殊勝な者ぢや、時に檜垣殿にも腕に覺へが御座らう、いなりとやらの好意に對し舞はでは今日

は叶ふまじ」

家臣「檜垣殿、過ぎし昔に若返り涯分舞ひをまひ候ふべし」

色々になむ、眼になる

唄「そのいにしへの白柏子、昔の花の振小袖、今更色も麻衣、短き袖を返し得ぬ心ぞつらき陸奥の布婦が細布

胸合はず

嫗「それとても昔手馴れし舞なれば舞はでは今は叶ふまじ」

唄「あきましながら麻の袖、露うち拂ひ舞ひいだす

さ歌ひ了つていなり檜垣兩人の舞ひになる

唄「思ひ寢の枕に立てる其人が胡蝶の夢か幻や、夕邊あしたの粧ひも、さむればすがた水の月、手にもとられずかけろうの蝶の翅の風につれ比翼の蝶の戯れ遊ぶ。

こ、迄兩人舞ひれさめし時瞬間舞臺一面暗くなり大勢の花の精舞姫姿にて何處よりさもなく出で來り以下大勢の舞ひになる

唄「時めくや、峰の松風調べにかよふ、戀の胡蝶の舞の袖、甘泉殿によもすがら、かたしく契る手枕も、君に

逢ふせの夢見草、驪山宮のたのしみは、月の詠めもさながらに、園の胡蝶の羽をやすめしほらしや。花に對して入相をしばらく待たせ給へや、夜は嵐のふかぬものは、たのが羽風にひらりひらりくくく狂ひみだるゝ花のつゆ、ぬれてしはしは羽をやすめ、又とびあがり翅かはして面白や。ゆたかの國の春の草、極さいしきも蝶の袖、さす手ひく手の千代八千代、萬歳樂とぞ舞ひをさむ。

(以上胡蝶の舞)

にて再び瞬間舞臺一面眞暗になり大勢の花の精何れへとも知らず消ゆる

元輔「不思議やな、今まで見れし舞姫は」

一同「何れへ參つたやら」

さ皆々驚く

家臣「御兩人様の舞の手の餘り妙なるにうかされて櫻の花の花の精が大勢來り舞ひたるべし」

家臣「無可有郷に莊周が」

家臣「蝶の使と踊りたるあの胡蝶の舞を偲ばれるでは御座らぬか」

元輔「ても不思議な事であるわい」

いなり「いとしまを」

空を眺めいなり思はず口走り

「たゞおれは確かに雁の一群」

と云ひ打消し思ひ入る

元輔「いかにも雁の一つら何れの空へかへるやら」

家臣の一人急に立ち上り

「花は根に鳥は古巢にかへるなりいざ／＼われも歸らうよ」

と扇を扇げつゝ、舞ひふと氣付き耻ぢ入る

家臣「昨夕の舞のをさらへにさんざ師匠から小言を云はれた揚句、やつとやつてけたあの一節、氣にして居たので興にうかされ今の失態、平に御許し遊ばされ」

元輔「これも時にとつての一興」

と咎めず微笑す此時以前の駕昇急ぎ走に登場

駕昇「仰せの通り日も暮れ方となりしゆへに迎へにと參上致しました」

家臣「餘りの面白さに日の暮るゝをも忘れて居やつた」

元輔「春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散る、曆日ならぬ一時に日の傾くをも忘れて居た」

皆の者歸り支度をなし元輔駕籠にのる

元輔「はじめ筑前守なりしに程もなく此國に來て再び相見つるに今はわれも人も老いぬ、又筑紫の方へ來べきに非ずか……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

「檜垣殿をさらば、いなり殿にも」

と名残を惜しみつゝ、花道に來る、その時檜垣いなりの肩にかたげたる櫻の小枝に吊せる新しき短冊を認め、いなりに矢立をかり

筆を走らせこれを家臣に渡す

元輔「白川のそこの水ひてちりたらむときにご君を思ひ忘れむ」

こ口吟みにつこりす

元輔「をさらば檜垣殿、いなり殿にも」

兩人別れを惜しむこなし、よき所にて幕

……一九一三、二、習作……

Serenape

三四郎

小 曲

しぐれ降る夜に「清常」^{キヨツネ}がへり
借りた蛇の目がしつとり濡れる
たのもしいよなまたそでもない
街の灯^ホかげのちららちらら。

こほろぎ

枯れた黄菊の葉のかけで
なくよこほろぎコ・コ・コ・

Allegretto のの Note

うたう心が添はないが
あきらめの身のひとふしか!

ぼんた

文苑

雪のふる日のぼんたの心

あはせ鏡のこつをいつ

ぎつとしごいた帯今宵

酔つて歸ればなほよかる。

小 太鼓

芝居のはねの小太鼓が

トロ〜ト、と鳴る宵は

遠いそなたを想ひ出す

なせか知らぬがたもひ出す。

歳晩書懷

一ノ一乙 齋藤 護國

讀書十歲學未成。

一片意氣蓋天下。

今年又盡何匆忙。

半生心事有誰妨。